

# 《時制の一致》と《法の一致》

## —自動翻訳ソフトの確度を射程に含めて—

### “Sequence of Tenses” and “Sequence of Moods” in the Light of Accuracy of Machine Translation

英米学科  
大森裕實  
Yujitsu O'MORI

#### 緒言

通訳翻訳(日本語⇄英語)を行なう際に顕在化する文法知識に関わる諸問題の中で、動詞の文法範疇(相・時制・法)をめぐる表現は、通訳翻訳者の頭を悩ませると同時に、克服すべき大きな課題である。ここでいう文法知識とは、言語学のフィールドではいくつかの術語で呼び習わされてきたものである——①ソシュール(Ferdinand de Saussure)の構造主義言語学では「ラング **langue**」(vs. パロール **parole**);②パーマー(Harold E. Palmer)の応用言語学(Direct Method)では「言語材料 **language as code**」(vs. 言語活動 **language as speech**);③チョムスキー(Noam Chomsky)の生成文法では「言語知識 **linguistic competence**」(vs. 言語運用 **linguistic performance**);④レイコフ(George Lakoff)及びラネカー(Ronald Langacker)の認知文法及び認知意味論では従来の二項対立を採らず、経験を基盤モデルに据えた「言語知識 **knowledge of language**」がそれに相当する。

本稿では、動詞に関わる「照応現象」(「時制の一致」「相の一致」「法の一致」)に特化して、その特性を明らかにするが、その過程において、最近一段と精度を増したと好評を博す2つの代表的自動翻訳ソフト(@TexTra@汎用 NMTとGoogle 翻訳[Google LLC ツール])を活用した翻訳例文を分析する。そこから、「ニューラル機械翻訳」<sup>1)</sup>の現状——翻訳確度と課題の一端を把握することができるであろう。最終的には、確かな文法知識に基づいて、同一意味内容を表現する際に生じる日本語・英語間の齟齬を埋められる言語的洞察力とは何かについて考究する。

#### 1. 動詞に関わる文法範疇——三位一体論

##### 1.1 現代英語の文法範疇 Overt vs. Covert

伝統科学文法の枠組みにおいては、動詞に関わる文法範疇(grammatical category)として「相」(Aspect)、「時制」(Tense)、「法」(Mood)の3つが指摘されるが、現代英文法の中でそれを分類表示すれば次のようになる。

1. Aspect (Progressive[進行相/be + -ing], Perfective[完了相/have + p.p.] )
2. Tense (Past[過去時制], Present[現在時制]) \*Future[未来]及び\*Perfect[完了]は含まない
3. Mood (Indicative[直説法/叙実法], Subjunctive[接続法/叙想法]) \*Imperative

[命令法]はここでは含まない

しかしながら、これら3つの範疇が別個の独立範疇ではなく、全体で一つのまとまりをなす「広義の叙法」であるとの指摘(細江逸記『動詞時制の研究』参照)や、これら3つの範疇は話者の「心理的時間の意識構造を表わしたもの——第1次構造がAspect;第2次構造がTense;第3次構造がMoodである」との指摘があること(佐々木達「Subjunctive Mood について」『英語青年』XCVIII-10, 1952年参照)にも十分に留意しておかねばならない。

こうした概念的範疇(notional category)重視(=意味重視)の立場に対峙して、イエスペルセン(Otto Jespersen)に代表される形態至上主義(=客観主義)の言語観があり、それは動詞の形態と意味が一对一の対応関係を示すことのできない範疇は認定できないとする立場である。その端的な事例は「時制」の下位分類に看取できる——すなわち、過去時制と現在時制の2形のみ認定し、未来時制は認めない。形態至上主義に通底する客観主義の立場から、時制とは何かを把握すれば、言語表現する事態が現在なのか過去なのかを区分する範疇であり、「過去形」という時制タグ付け(語形変化)は、譬えれば、「空港のターンテーブルで自分のスーツケースを見分けるようなものであり、外側だけが問題で中身には立ち入らないものだ」と言える(宗宮2018: 15)。換言すれば、言語表現における「時」は誰からもわかるもの、形の上から見てわかりやすい卓立した(salient)ものであることが絶対十分条件であるということになる。

## 1.2 時制と相の関係

心理的「時」を区分する文法範疇は、英語においては、Tense-Aspect 複合でとらえるリーチ(Geoffrey Leech)のアプローチ(*Meaning and the English Verb* 参照)にその合理的解決策を見出すことになる——2時制[Simple, Past]×2相[Perfect, Progressive]。

さらに、それに改良を加えて、新たに「単純相」という「現在形」に相当する中立的「相」範疇を設定することにより、英語話者の「時」は 2T×3A(2時制[現在・過去]と3相[単純相・進行相・完了相])の複合によるとする宗宮説(2012: 38)には説得力がある。

## 1.3 時制と法の関係

通常の発話において、我々は「法」(以下のM1とM2)を常時切替えながら言語表現を行なっている。ここでいう「法」とは、“... they [moods] express certain attitudes of the speaker towards the contents of the sentence”(Jespersen 1924: 313)と定義されるものである。

**M1: Indicative Mood (叙実法)** (≪ Tense(時制)が優勢)

事態(event)をとらえる発話時点からの時間軸上の距離が Speaker's Point of View

**M2: Subjunctive Mood (叙想法)** (≫ Tense(時制)が劣勢)

命題内容に対する Speaker's Assessment が重要

## 2. 動詞をめぐる照応(一致)現象

### 2.1 時制の一致(Sequence of Tenses)

複文における主節の動詞が過去時制の場合に、従属節の動詞も過去時制で表現する現象(Eg 2)。主節の動詞が現在時制(含:未来表現や完了表現)の場合には、従属節の動詞の時制に制約はない(Eg 1)。

Eg 1 I **know** that your sister **was singing** after dinner.

Eg 2 I **noticed** that he **was** there.

主節の動詞のメンタルスペースが「過去」が設定されたため、従属節の内容(命題)も同じメンタルスペース上に展開する必要があると考えられる。

## 2.2 相の一致(Sequence of Aspects)

一般的な文法書に「相の一致」という術語を看取することは稀だが、それは Aspect が盛んに論じられるようになる以前には、広義の Tense の枠組みの中で(H. Sweet の Tense-Aspect は典型例)「相」がとらえられていたことに起因するのであろう。

Eg 3 I **had finished** my homework when he **called**.

2つの事態の前後関係を表わすために、一方を完了相にして表現する。

Eg 4 I **was doing** my homework when he **called**.

2つの事態の同時性を表わすために、一方を進行相にして表現する。

(宗宮 2018: 47)

## 2.3 法の一致(Sequence of Moods)

本節の表題に掲げた「法の一致」という術語は文法書では見受けられないが、「時制の一致」と同様に、複文における主節動詞の要求するメンタルスペース(叙想的概念)に合致する動詞(命題表現)が従属節で選択される言語現象をいう。

Eg 5 We **demand** that the burden **should** **be** removed.

Eg 6 It **was proposed** that we **should** **start** at once.

米語用法に顕著に見受けられるとされる法助動詞 *should* の省略だが、省略されたというよりは、仮定法現在の古い用法が残存したものと考えられる(Curme 1931: 403)。もう少し正確に記述すれば、米語用法でも法助動詞 *should* が優勢な時期(18-19世紀)があったが、1920-60年の期間に先祖帰りの(仮定法現在を再び使用するようになった)ものと見ることができる(宗宮 2018: 127-8)。

なお、命令的叙想法(mandative subjunctive)の場合、叙想法現在のままで、時制の照応は起こらない(安藤 2005: 700)。

Eg 7 We **insisted** that he **leave** at once.

## 2.4 照応の優先的選択——「時制の一致」vs.「法の一致」

「時制の一致」(Sequence of Tenses)の制約が及ばないものの一つに、命令的叙想法における叙想法現在があることは前節で指摘したが、それは「法の一致」(Sequence of Moods)と関連をもつ。

おそらく「時制の一致」は同一の法性(Modality)の下で働く制約であると指摘できる。換言すれば、法性のメンタルスペース(叙実法 Indicative/ Fact; 叙想法 Subjunctive/ Thought)が優先的に立ち上がり、その認知的スペースから時性(Temporariness)のメンタルスペースが階層的に展開すると考えられる。

次の例文では、叙実法(Indicative Mood)というメンタルスペース上で命題が言語化されているため、主節の動詞(陳述部)と従属節の動詞(陳述部)の時制が一致する。

Eg 8 a. He thinks that she is kind.

Eg 8 b. He **thought** that she **was** kind.

*ind. past*                      *ind. past*

しかし、次の例文では、叙実法 (Indicative Mood) で立ち上げたメンタルスペースではあるが、従属節の命題は叙想法 (Subjunctive Mood) で言語化されているため、主節の動詞 (陳述部) と従属節の動詞 (陳述部) の時制が一致する必要がない——法の不一致による時制の不一致が生じている。

Eg 9 a. I wish I were a bird.

Eg 9 b. I **wished** I **were** a bird. (鳥になれたらいいのになあと私は思った)

*ind.*                      *subj.*    \*had been にはならない                      (宗宮 2018: 105)

従って、ここで改めて、「時制の一致」に優先して「法の一致」が働くことを Advanced Level の文法知識として明記しておきたい。

### 3. 時制の一致

#### 3.1 日英語表現における差異

時制に関わる言語化を概観すると、英語の表現形式では、叙述部それぞれに過去時制の標識のつく ax+bx+cx のような形を採る。つまり、主語中心で文を展開する英語では、文頭の主語の直後に置かれる動詞に当該文の命題の「時」を決定する権限が附与されるため、第一動詞 (過去形) に後続する動詞にはすべて過去時制標識がつけられている。

一方、日本語の表現形式では、英語とは対照的かつ対称的に、最後の叙述部に過去時制の標識のつく (a+b+c)x のような形を採る。これは、日本語が述語中心で展開されるからであり、文末に置かれる動詞 (述語) に当該文の命題の「時」を決定する権限が附与されるため、それまでに置かれる他の動詞は「時」を表わす必要がなく、「完了/ 未完了」を示せばよいのである。

上掲の個別言語の特性を十分に理解せずに、英文和訳の際に産出してしまう不自然な日本語訳文の典型例——時制と代名詞の問題を含むものとして次の文が指摘されるが、入れ子型の日本語訳文を回避すれば、日英語の差異を克服することが可能となる。

Eg 10 Mrs. Robinson **said** that she **was happy**.

ロビンソン夫人は彼女が幸せだったと言った。(不自然訳文)

⇒私は幸せ者だ、とロビンソン夫人は言った。(修正訳文)

#### 3.2 自動翻訳ソフトの確度と問題点——事例研究

本稿で論じてきたように、「時制の一致」が日本語と大きく異なる英語の特性であるとすれば、それは翻訳の際に細心の注意を払って、克服しなければならない課題であろう。そこで、最近ではニューラルネットワークを利用した「ニューラル機械翻訳」(NMT)の発達により格段の進歩を遂げたと評価の高い自動翻訳ソフト2機種 (@TexTra®と Google 翻訳) を採り上げて、日本語から英語に翻訳する際に生じる「時制」に関する問題点を観察し、そのそれぞれについて分析を試みる。なお、以下に記載した各々の番号箇所での表記は次のようになっている。

1 行目 原文 (日本語) 例文は『英語正誤問題の新研究 (改訂版)』から選定

2 行目 @TexTra®汎用 NMT (「。」あり) 情報通信研究機構開発モデル

3 行目 Google 翻訳 (「。」あり) 一般汎用モデル

4 行目 英語翻訳文に関する分析コメント (※印箇所)

- (1) 太陽は月よりも大きいと教わった。

I was taught that the sun **was** larger than the moon.

I learned that the sun is bigger than the moon.

※@TexTra®では、**時制の一致**の制約が強すぎて、その例外規則である「不変の真理」が翻訳できていない。

- (2) 明日雨なら彼は在宅しているでしょう。

If it rains tomorrow, he will be at home.

If it rains tomorrow, he will be at home.

※未来の時を表わす副詞節中では、現在時制で未来を表わす。どちらも問題なし。

- (3) また彼らが口論しているのが聞こえる。

I can hear them quarrelling again.

I can hear them quarrelling.

※知覚動詞は通常進行形をとらない(\*am hearing)。どちらも問題なし。

- (4) 彼はこの前の日曜以来病気だ。

He has been sick since last Sunday.

He has been sick since last Sunday.

※現在形ではなく現在完了形を用いる。どちらも問題なし。

- (5) 最近五年間彼に会ったことがない。

I have never met him for 5 years.

I have never met him for five years recently.

※現在完了形と共起する副詞句は for/ since である。“... for the last five years”と表現してもよい。

- (6) 彼は二日前からここに居る。

He has been here for 2 days.

He **is** here two days **ago**.

※「現在完了形では“... since two days ago”でも可能だが、ago を単独で使用することは不可。現在形と ago が共起することも不可。Google 翻訳では不首尾。

- (7) 君は中国に行ったことがありますか。

Have you ever been to China?

Have you ever been to China?

※現在完了形を使った表現の典型例(\*Have you gone to ...? は不可 / Did you ever go to ...? でも可[特に米語では一般的])。

(8) いつお帰りでしたか。

When did you come back?

When were you going home?

※時を尋ねる Wh 疑問文中では、現在完了形は不可。どちらも問題ないが、「お帰り」になる方向性が異なる——帰着点なのか出発点なのかの視点の相違あり。

(9) 昨日この本を読んだ。

I read this book yesterday.

I read this book yesterday.

※現在完了形は明確な時を表わす副詞句とは共起しない。

(10) 仕事が終わったらプールに泳ぎに行こう。

After work, let's go swimming in the pool.

Let's go swimming in the pool after work.

※時を表わす副詞節中では未来完了形は生起しないことに留意 (\*after I will have done my work) — どちらの英語表現も前置詞 after による副詞句でこの問題を回避。

(11) 本があいたら返してください。

Please return it if you have a book.

Please return it if there is a book.

※時を表わす副詞節中では未来完了形は生起しないことに留意 (\*when you will have done with it)。Google 翻訳は誤訳(「本があったら」と誤判読したのではないか)。

(12) 私は雇い主に道具を家においてきたと言った。

I said to my employer that I had a tool in my house.

I told my employer that he left the tool at home.

※時制の一致 (... that I **had left** my tools) が要求される箇所だが、どちらの英語表現も「おいてきた」に充てて完了形を不採用。また、Google 翻訳では、当該発話の文脈が十分に理解されていないため、従属節の主語が不自然。

(13) 彼は日本中の名所は、ほとんど訪れたと私に語った。

He told me that most of the famous spots in Japan came to me.

He told me that the sights in Japan almost came.

※時制の一致 (... **he had visited** almost all the noted places in Japan) が要求される箇所だが、どちらの英語表現においても、日本語の話題化助詞「は」を主語として誤判読されたため、従属節が容認不可能。日本語に対して(統語構造を解かりやすくするための)前編集が必要とされる典型例。

(14) 父は私が成功したのを聞いて大そうよこんだ。

My father was pleased to hear that I was successful.

My father was pleased very much to hear of my success.

※時制の一致 (... that I **had been successful**) が要求される箇所だが、@TexTra®では不首尾。Google 翻訳では名詞句表現にして、問題を回避。

(15) 来月でここに満十年住むこととなります。

Next month, we will be living here for 10 years.

I will live here for ten years here next month.

※未来完了形 (will have lived here) が期待される箇所だが、どちらも不十分な表現になっている。@TexTra®では「住むことになる」を未来進行形で表現しているが、文脈を十分に判読していない。

(16) 11 時までには劇場を出ているでしょう。

You must be out of the theater by 11 o'clock.

I will have left the theater by 11 o'clock.

※未来完了形を使用した Google 翻訳のほうが一般的だが、@TexTra®では話し手の査定の入った法助動詞の認識的用法 (epistemic modals) を採用している。日本語原文に主語が明示されていないことに起因する。

【日本語原文に前編集を施した訳例編】

(17) 僕は疲れたので、草の上に寝転んだ。

I was tired, so I fell on the grass.

I was tired, so I lay down on the grass.

※so ... that 構文でもよいところだが、いずれにしても同時性を表わし、単純過去形で問題なし。

(18) 彼は大きな家を建てたが、それには多額の費用がかかったに違いない。

He built a big house, but it **must have cost** a lot of money.

He built a big house, but it **must have cost** him a lot.

※過去のでき事に対する話し手の査定 (推量) 表現であるため、完了不定詞が使用されており、問題なし。

(19) 私は壁にその絵を掛けた。

I hung the picture on the wall.

I hung the picture on the wall.

※過去の時が明示的であり、話し手がその行為の心理的影響を現在あまり感じていないのであれば、単純過去形で問題なし。I have hung ... と訳出したい日本語表現でもある。

(20) 私たちの先生は、何か説明したい時には、黒板を指差します。

Our teacher points to the blackboard [on the blackboard] when he wants to explain something about it.

Our teacher points to the blackboard when **we** want to explain something.

※習慣を表わす現在時制形の使用で問題ないが、Google 翻訳の場合には、従属節の主語を取り違えており不自然。日本語に施す(統語構造を解かりやすくするための)前編集が不十分であった事例。

(21)明日雨が降ると思いますか。

Do you think it will rain tomorrow?

Do you think it will rain tomorrow?

※日本語では明日のでき事であっても未来表現の助動詞が使われないことをよく理解した英語表現で、どちらも問題なし。

(22)彼が来るまでみんなで待ちましょう。

Let's wait all together until he comes.

Let's wait together until he comes.

※時や条件を表わす副詞節中では、未来のことであっても現在形で表現する文法規則が遵守されており、どちらも問題なし。

(23)僕は去年のヨーロッパツアーの間にローマを訪れた。

I visited Rome during the last year's European tour.

I visited Rome during the European tour last year.

※前置詞 **during** 句により、過去時が明示されているため、主節の動詞は単純過去形で表現されており、どちらも問題なし。“I have visited Rome while I was travelling around in Europe last year.” とすれば、ローマ訪問が **vivid** な思い出として脳裡に浮かぶような心理的距離の近い表現となるかもしれない。

(24)彼は昨日その本を私に送ってくれたが、そんな親切な人に出会ったことがない。

He sent me the book yesterday, but I have never met such a kind person.

He sent me the book yesterday, but I have never met such a kind person.

※重文の場合には、第一命題と第二命題との間に時制のズレが生じて問題にはならない。第一命題では客観的事実として過去形が明示的時間表示とともに用いられているが、第二命題ではそれを根拠として話し手が「彼」なる人物に対する親和性も併せて描写すべく現在完了形が用いられていると分析できる。

(25)あなたはこの国にどのくらい住んでいますか。

How long have you lived in this country?

How long have you lived in this country?

※現在完了形の使われる典型的な事例。How long have you been living ...?とのニュアンスの差を看取するにはこの日本語文からは無理。

(26)私たちの先生がもどってきたらすぐに始めましょう。

Let's start as soon as our teacher comes back.

Let's begin as soon as our teacher comes back.

※時や条件を表わす副詞節中では、未来のことであっても現在形で表現する文法規則が遵守されており、どちらも問題なし。

## 結言

本稿では、言語使用者にとって必要不可欠な文法知識として、動詞を取り巻く概念「相」「時制」「法」があること、また、それらが三位一体をなす文法範疇であることを指摘した。それに加えて、英語学習者が従来から「時制の一致」として理解している文法事項には「相の一致」や「法の一致」が関連していることが明らかではあるが、客観主義の立場から英文法を記述すれば、外から形のわかる卓立した現象である「時制の一致」に言及が収斂することも指摘した。

「時制の一致」は日英語翻訳を行なう時に際立つ差異であり、克服されるべき課題である。最近注目を集める「ニューラル機械翻訳」において、その問題がどのように処理されて訳出されているのかを本稿では事例研究として明らかにしたが、そこでは、時制表現、代名詞(特に従属節の主体)表現に顕著な違いが見受けられた。藤田篤(情報通信研究機構主任研究員)の指摘にあるように<sup>2)</sup>、AI(人工知能)の発達により、NMT方式が脚光を浴び、システム自体がエラーを修正する学習機能を備えるようになった結果、近い将来、人間が関与する部分が「機械翻訳しやすい文構造に整形する前編集や後編集」に限定されるのではないかとの予見が蓋然性をもつ分析結果であったといえる——日本語原文に前編集を施した事例(17)–(26)には英語訳出文に時制表現の誤りが認められないことで部分的に証左されたとと言える。

言語的洞察力とは、認知言語学が経験を積極的に基盤に取り込んで定義するところの「言語知識」に裏打ちされたものでなければならない。つまり、文法研究が言語使用者にとって「活きた知識」として働く時に、はじめて **Language Insight** というものが実効性を有することになるのであろう。いわば、個別の言語現象に対して、繊細な「虫の目」の視点(微視的視点)から、大局的に俯瞰できる「鳥の目」の視点(巨視的視点)に転換することができた時にこそ、言語的洞察力が修得されたと考えられるのではないか。日英語翻訳における言語表現の差異に関する問題解決にも、この趣の言語的洞察力が求められている。

※本稿は、大学英語教育学会(JACET)第57回国際大会(2018)において実施されたシンポジウム「理想的英語教員に求められる《時制》に関する知識—What Ideal Teachers of English should Know about Tense based on New Approaches」における筆者担当第一発表「三位一体 Aspect-Tense-Mood:時制・相・法の一致」に加筆・修正を施したものである。

## 註

- 1) ニューラル機械翻訳(NMT:Neural Machine Translation)とは機械学習の一手法であるニューラルネットワークを利用した機械翻訳のことをいう。詳しくは、中澤敏明「機械翻訳の新しいパラダイム:ニューラル機械翻訳の原理」『情報管理』60: 5(2017)参照。
- 2) 藤田篤(情報通信研究機構・先進的音声翻訳研究開発推進センター・先進的翻訳技術研究室主任研究員)による講演「機械翻訳の仕組みと使い方—NICTにおける実用化例と取り組みの紹介を中心に—」(愛知県立大学「通訳翻訳研究所」第二回定例講演会 2017.12.20)参照。

## 参考文献

- 浅川 伸一 (2007) 「ニューラルネットワークが文法を覚えるとき」『言語』36:11.大修館書店.
- 安藤 貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.
- 千葉 修司 (2018) 『英語の時制の一致—時制の一致と「仮定法の伝播」』(開拓社叢書 32) 開拓社.
- Comrie, B. (1985) *Tense*. Cambridge U. P. [邦訳 『テンス』 久保修三, 開拓社, 2014.]
- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. Heath.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説〈改訂3版〉』 金子書房.
- 細江 逸記 (1932/1973) 『動詞時制の研究〈新版〉』 篠崎書林.
- 井上 義昌 (1966) 『詳解 英文法辞典』 開拓社.
- Jespersen, O. (1924) *The Philosophy of Grammar*. Allen & Unwin. [邦訳 『文法の原理』 半田一郎, 岩波書店, 1958.]
- Leech, G. (1987<sup>2</sup>) *Meaning and the English Verb*. Longman. [邦訳〈第1版〉『意味と英語動詞』 國廣哲彌, 大修館書店, 1976.]
- 中澤 敏明 (2017) 「機械翻訳の新しいパラダイム: ニューラル機械翻訳の原理」『情報管理』60: 5. (URL) [https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/60/5/60\\_299/\\_html/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/60/5/60_299/_html/-char/ja/)
- 溝越 彰 (2016) 『時間と言語を考える—「時制」とはなにか』(言語・文化選書 61) 開拓社.
- 大森 裕實 (1990-1992) 「A Study on ASPECT as a Grammatical Category in English: Part I - III」『名古屋女子大学紀要〈人文・社会編〉』36 - 38.
- 大森 裕實 (2006) 「概念的範疇の言語化にみる機能と形—英語動詞の直説法過去形による叙想的機能」『言語文化と言語教育の精髓』大阪教育図書.
- 坂原 滋・水光雅則・田窪行則・三藤 博 [共訳] (1996) 『メンタル・スペース』白水社. (orig. Gilles Fauconnier, *Mental Spaces*, Cambridge U. P., 1994)
- 宗宮喜代子 (2012) 『文化の観点から見た文法の日英対照—時制・相・文型・格助詞を中心に』ひつじ書房.
- 宗宮喜代子・糸川 健・野元裕樹 (2018) 『動詞の「時制」がよくわかる 英文法談義』大修館書店.
- Swan, M. (2016<sup>4</sup>) *Practical English Usage*. Oxford U. P. [邦訳〈第4版〉『実例・現代英語用法辞典』 吉田正治, 研究社, 2018.]
- Sweet, H. (1898) *A New English Grammar, Pt. II: Syntax*. Clarendon.
- Thomson, A. J. and Martinet, A. V. (1986<sup>4</sup>) *A Practical English Grammar*. Oxford U. P. [邦訳〈第4版〉『実例英文法』 江川泰一郎, Oxford 大学出版局, 1988.]
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 山岡 洋 (2014) 『新英文法概説』 開拓社.
- 〈資料〉
- 多田 幸蔵 (1968) 『英語正誤問題の新研究〈改訂版〉』洛陽社.